

『教育心理学年報』 執筆要項

2021年3月12日制定

【「わが国の教育心理学の研究動向と展望」の内容】

1. 当該の『教育心理学年報』が刊行される年の前々年の7月から前年の6月までの1年間を中心に、2、3年から数年の範囲で『教育心理学研究』に掲載された論文や、この間に刊行された教育心理学に関連する諸研究、著書等にみられる当該領域の動向、トピックス、成果、問題点について概観し、執筆者独自の視点から展望を執筆する。
2. 概観にあたっては羅列的な紹介を避け、それぞれの研究の意義や今後の研究に対するインパクト等についての著者の見解を述べる。その際、執筆者が特に関心を持つ特定の領域に絞ってもよい。必要な場合には、海外の研究動向についても適宜紹介・論評する。
3. 専門領域以外の研究者にとっても十分に理解できるようにわかりやすい記述を行い、この領域への研究者の新たな導入の役割をもたせることにも留意する。
4. 日本教育心理学会総会の記録という観点から、当該の『教育心理学年報』の刊行年度の総会（執筆時点で直近の総会）の発表論文については、必ず触れることとする。その際、はじめに総会発表論文のテーマと数の概況や推移を紹介し、その後、特定の領域に絞って論じる、あるいは、特定の領域に絞って論を展開し、その文脈に沿って、総会発表論文のテーマに簡単に触れるなど、記述の方法は執筆者が適宜選択する。

【「展望」および「教育心理学と実践活動」の内容】

5. 依頼したテーマについて、原則として最近数年の間に発表された諸研究を展望し、執筆者独自の視点からまとめる。ただし、必要に応じてその期間外に発表された研究に言及してもよい。
6. 対象とする研究は、必ずしも日本の研究に限らないが、できるだけ日本の研究を中心として、必要に応じて海外の研究もとりあげる。
7. 執筆に際しては、関係する研究の羅列的な紹介を避け、いくつかの注目すべき研究を重点的に取り上げて、今後の研究の発展方向を示唆するようにする。
8. 専門領域以外の研究者にとっても十分に理解できるようにわかりやすい記述を行い、この領域への研究者の新たな導入の役割をもたせることにも留意する。

【「討論」の内容】

9. 教育心理学の研究領域における特定のテーマに関して、複数の執筆者がそれぞれの視点から誌上討論を行う。その際、展望論文のように根拠資料をすべてレビューする必要はない。

10. 執筆者のうちの1人が代表者として全体を統括する。
11. 専門領域以外の研究者にとっても十分に理解できるようにわかりやすい記述を行い、この領域への研究者の新たな導入の役割をもたせることにも留意する。

【講演・シンポジウム等のまとめの内容】

12. 講演・シンポジウム等の企画趣旨、講演・話題提供・指定討論の内容、フロアとの質疑応答等、講演・シンポジウム等の全体を、当日参加しなかった会員等にも理解できるように執筆する。
13. 当日の講演・シンポジウム等では十分に議論が尽くされなかった事柄についても、講演者・話題提供者・指定討論者の意見を適宜追加して記述する。
14. 逐語録ではなく、論文に準じた体裁で執筆する。

【書式等】

15. A4判縦置き・横書きで、左右の余白を5.5cm以上とし、1ページの字数は24字×45行（刷り上がり2段組の1段にあたる）とする。右横の空白に、図表等の挿入箇所を指定する。
16. 各ページにページ番号と行番号を記載すること。
17. 「わが国の教育心理学の研究動向と展望」、「展望」、「教育心理学と実践活動」、「討論」の各カテゴリの論文（以下、「論文」とする。）は、24ページ以内とする（引用文献は含まない）。講演・シンポジウム等のまとめは、16ページ以内とする（引用文献は含まない）。
18. 論文の題目は自由に決めてよい。英文題目も付ける。
19. 論文には500字以内の要約と5個以内のキーワードを付ける。あわせて、100～175語以内の英文要約と日本語キーワードに対応する英文キーワードも付ける。
20. 講演・シンポジウム等のまとめの題目は、講演・シンポジウム等の題目と同じにする。英文題目も付ける。
21. 講演・シンポジウム等のまとめでは、講演者・登壇者等の氏名のローマ字表記および所属の英文表記を付ける。

【執筆スタイル】

22. 執筆スタイルは、『教育心理学研究』執筆要項に準じる。
23. 本要項および『教育心理学研究』執筆要項に定められていること以外の原稿記述の詳細については、学会ホームページに掲載している「日本教育心理学会論文作成の手引き」の最新版を参照すること。